



# マルボロ



Marlboro

月村 翼

「今だから言えるんだけどさ」

「ん？」

「俺、お前のこと好きだったんだ」

彼のマルボロの煙がほんわりと夜空に掻き消えた。

——Marlboro——

今日もようやくバイトを終え、俺はジャンパーを羽織るとチャックをきっちりと首までしめた。ここ数日、気温は最高でも一桁台しかない。まして夜にもなれば、0度に近い温度のはずだ。

バイト先であるコンビニの青い看板を横目に、帰路につく。寒さが身に凍みるときは、何も考えずに歩くのが1番だ。目的地のことだけを考えて、そこへの道のりだけを思えば良い。ジャンパーのポケットに手を突っ込み、規則的に握ったり開いたりを繰り返す。気まぐれに、すれ違う人に、無意味に視線を送る。

振り返った時、誰かと目が合った。

彼が笑顔になるまでそう時間はかからなかった。俺のほうもややあってから彼が既知の友人であったことに気付く。

「久しぶりだな、元気にしてたか？」

絵に書いたような再会の言葉だ。彼は、紺のスーツにベージュのコートといういでたちで、すっかり立派なサラリーマンだった。スーツに着られているような初々しさは消え、自然に着こなしている。

「会社帰り？」

「うん。お前は？」

「俺も似たようなところ」

バイト帰りだなんて、わざわざ言う必要もないだろう。

「なあ、これから一杯どうよ」

彼が指先でくいと何かを傾ける仕草をした。飲みのお誘いだ。俺は悩んだ。どう言えば相手の納得する断り方が出来るかどうか。

「悪いけど、金欠でさ」

「そんなの、おごってやるって。安くて上手い店知ってるんだ。穴場だから客も少ないし」

彼は屈託なく笑い、早速歩き出そうとする。

俺は昔から結構押しに弱い。

連れてこられたのは、高架下のおでんやだった。サラリーマンが好んで入りそうな、言ってみ

ればサラリーマンの聖地だ。そんな所へ、私服の人間を誘うとは。

「ほら、おごるからなんでも好きなものを頼めよ」

彼がそう言うから、とりあえずはんぺんを、と言うと相変わらず妙なモンが好きだよな、と笑われた。昔と変わらない笑顔で。相変わらず箸が転げなくても笑い出すやつだ。彼はビールを頼むと、おでんをおつまみ代わりにお喋りを始めた。俺はときどき相槌を打ちながら、おでんの美味さに舌鼓を打つ。

五分と待たずに通過していく電車の喧騒が、静けさをごまかしてくれる。

「そういえばさ、この間のクラス会、どうして来なかったんだ？」

「クラス会？ いつあったんだ？」

俺が聞き返すと、彼はまるで西洋人みたいな大げさな仕草で頭を押さえて見せた。

「伝わってなかったのかよ……あのバカ幹事め、今度あったらしめる」

きっと、俺のところにも電話か手紙で連絡はあったのだろう。けれど、あいにくと俺は高校を卒業してから6年の間に8回は引越ししている。その都度、新しい連絡先を誰かに伝えておいたほうが良いのは分かっていたが、面倒でそのままにしていた。ここでこうして会えたのが奇跡だ。

幹事をののしりながら彼が懐から取り出したのは、白い携帯電話だった。慣れた手つきで小さな機械を操作しながら、

「なあ、番号教えろよ。次は絶対に伝えるからさ」

「――俺、ケータイ持ってないんだけど」

そう答えてやると、彼は再び大げさに驚いた。いまだき小学生でも持っているものを持ってないなんて、と言う驚きだろう。せっかく取り出した携帯電話をパタンと閉じて元に戻すと、今度は同じ懐から煙草を取り出した。そう言えば彼は高校時代から時々煙草を吸っている姿を目撃している。かなり年季の入った愛煙家だ。

「年末って忙しいよな。師走っていうけど、いろんな人が走りっぱなし」

話題を変えた彼は、ビールをお代わりすると、俺の前に置いた。どうやらこれもおごってくれるらしい。はんぺん1枚じゃ男が廃るとでも考えたのだろうか。

「そう言えば、お前ってどこで働いてるんだっけ」

「……駅前のコンビニで、週4日」

「え、あ……」

彼は返事に窮した。別に彼を困らせようとは思っていない。俺の生き方が悪いせいだろう。気まずい間を埋めるため、俺たちは揃ってビールをあおった。

「就職難の時代だもんな。そう言うこともあるさ」

自分に言い聞かせるような声だった。

「いい加減、まともな職につかなきゃとは思うんだけどね」

彼の考えに合わせて嘘をつく。職を探そうとしたことはなかった。必然性を見出せなかった。

「あーあ、俺がもっと偉かったらな。仕事の幹旋とかしてやれたのに」

入社3年じゃ無理だと思うよ、とコメントすると軽く頭を小突かれた。俺が言うなよ、という

ところか。

おでんやを後にすると、どちらから言い出すでもなく足は駅のほうへと向かっていた。川に沿って続くプロムナードを歩く。レンガで舗装され、街灯で上品にライトアップされている。ただ歩くだけにはもったいない道だ。川は対岸のネオンを映してゆらゆらと揺れている。時折魚がはねるのかイレギュラーに水音がする。

彼はふと欄干に寄りかかって止まった。目をつぶり、夜風を浴びている。アルコールの熱を飛ばそうとしているようだ。俺はそれを少し離れた場所から見ていた。ただ見ていた。

つぶっていた目をふと開けると、彼は懐から煙草を取り出した。ライターの花が一瞬彼の顔を照らす。垣間見えた伏目がちの彼の顔は、不思議な色気を伴っていた。少し上を向いて煙を吐き出す。煙の行方を眺めていた目が、唐突に俺の視線とぶつかった。手招きしてくる。彼の元へと行くと、

「吸いたいならそう言えって。ほら」

彼は一度しまった箱を取り出すと、少し揺らして中味を取り出しやすいようにしてから俺に差し出した。そう言うつもりじゃない。俺は丁重にそれを断った。彼は少し残念そうに箱をしまう。

煙草を吸う人って、どうしてこんなに美味しそうな顔で煙を吸うんだろう。俺が彼の顔をやっぱりボーっと眺めていると、

「タバコは健康に悪い、とか言わないのか？」

「それくらい分かってて吸ってるんだろ」

俺の返事に、彼は肩を揺らして笑った。煙草をとんとんと揺らして灰を落とす。それから、急に真面目な顔になった。

「今だから言えるんだけどさ」

「ん？」

「俺、お前のこと好きだったんだ」

一瞬だけ、世界から音が消えた。彼との距離が全てに思えた。

唐突だった。あまりに突拍子がなかった。思わず笑ってしまいそうになるほど。

「お前、何言い出すかと思ったら……」

俺が予定通り笑いながらコメントすると、彼は少し不機嫌になった。

「何か別の反応はないのかよ。驚くとか何かさ」

「――だって、過去形なんだろ。思い出は美しいって、相場が決まってる」

屁理屈だ。自分で言いながら分かる。

「俺とお前の思い出のどこが美しいっていえるんだよ」

「百歩くらい譲って片目で見れば、そう見えないこともないだろ」

「まあな」

彼は意外とあっさり認めた。再び紫煙をくゆらす。

「――次のクラス会は、絶対お前も誘うからな。またちよくちよく飲もうな」

「次って、いつ？」

「俺が幹事やるから、俺が決める。近いうちにやるから、楽しみにしてやがれ」

待ってるよ、と笑う口から煙が噴出す。さっき人に告白してきた口とは思えない。

「俺の企画するクラス会は凄いで。ビンゴ大会あり、カラオケあり、暴露会ありの四次会ありだからな」

どこまで本気なのか分からない。俺は彼の偉大なる構想に適当に相槌を打つ。

彼は不意に左右を確認すると「他言無用な」と俺に前置きしてから、半分の長さになっていた煙草を川へと放り投げた。体よく共犯者にされてしまったらしい。

俺たちは再び駅へと歩き出す。彼は再び煙草に火をつけた。すっかりヘビースモーカーだ。

「いつから煙草吸ってるんだ」

「ん、いつからだろうな……」

彼は俺の問いに首を傾げて考えていたが、やがて

「家族がみんな吸ってたからな。あんまり違和感なくすんなりと、中学のときあたりから」

悪びれない笑顔で言うから、それがいけないことだという指摘も出来ない。俺が飽きれているのを知ってか知らずか、彼はむきになって、

「俺、いろいろ試してたんだよ。どの銘柄が良いかってさ。で、最近決めたんだ」

「なんの銘柄に？」

「マルボロ」

口で言っただけでは分からないと判断してくれたらしく、彼は懐から箱を取り出すと俺に渡した。街灯の明かりを頼りに見たパッケージは、煙草を吸わない俺でも見たことのあるデザインだった。

「どうしてこれにしたんだ？」

「知りたい？」

「うん」

彼は、中空で何かを数えるような仕草をした。やがてその数が合ったのかうんぬんとうなずくと、

「たしかお前は英語の成績は良かったんだよな。じゃあ、分かるんじゃないか」

意味深な前置きの後、歌うように言った。

「Man always remember love because of romance only」

日本語発音の英語だから、すぐに頭の中で文字列に変換できた。

「どう言う意味だ？」

「マルボロの頭文字は、その文章から取られてるんだって」

彼のくれた豆知識を元に、もう一度パッケージを見る。英文を思い返し、たしかにそうだと納得する。けれど、しかし、それがどうしたというのか。

「日本語訳出来ないかな？」

「俺が現場から退いて何年になると思ってる」

「俺と同じくらいだね。じゃあ無理か」

彼はからからと笑うと、やっぱり歌うように節をつけて言った。

「その訳はねえ、『人は本当の愛を見つけるために恋をする』」

ずいぶん口マンチックな意味だ。

彼の口が何かを呟いた。けれどその声は電車の音にかき消されてしまった。駅が近い。電車が通り過ぎるのを待って、彼はもう一度口を開いた。

「お前のうちって、たしか線路の向こうだったよな」

さっき言いかけたのとは違う言葉だった。

「よく覚えてたな」

「じゃあ、ここでお別れってことか」

「そうみたいだな」

本当の愛は見つかったのか。

「じゃあ、またな。今度お前のバイト先に寄るから」

「やめろよ、気持ち悪いな」

俺が好きだって言うのは、本当の愛への足がかりだったのか。

彼は腕時計を見やり、少し歩調を早めた。

「じゃあな。元気でやれよ」

「そっちもな」

彼は、こちらに手を振ると、改札機の向こう側へといってしまった。俺はふらりとUターンする。

線路の下をくぐり、ひとけのない通りを歩く。彼が乗っているかもしれない電車が発車の合図を出した。

——人は本当の愛を見つけるために恋をする

彼の声が蘇る。俺は不意に目頭が熱くなるのを感じた。彼に会ってからずっと抑えこんでいた思いが、せきをきったのだ。誰かの歌にあったみたいに、上を向く。

彼は、俺のことを好きだったみたいだけど。

「まだ好きなききは、どうすれば良いんだよ……ッ」

いつも、言葉を飲みこんできた罰だ。

「好きなんだよ、お前のこと……」

大事な言葉は、いつだって相手に伝わることなく体の中を駆け巡る。

彼のマルボロを、ポケットから取り出した。

——人は本当の愛を見つけるために恋をする

俺は、少し躊躇しながらも、それにそっとくちづけをした。

これがきっと、俺の本当の愛ならば。

ある種の永遠を内包した愛ならば。

俺が死ぬまでの永遠の中、きれいな愛でありつづけるのだ。